埼玉女子短期大学研究紀要　第3号　1992.03

《研究ノート》

ディコンストラクション批判とリアリズムの復権に向けて — 最近の動向

Toward a Critique of Deconstruction and Revival of Realism

— Some Recent Trends

衣川清子
Kiyoko Kinugawa

かなり以前のことになるが、フランク・レントリッキアはその大著『新批評以後』（1980年）の中で、ディコンストラクション（またはポスト構造主義）に関して、新批評と同じフォルマリズムに属し、文学批評から社会性や歴史性を排除した方法論であるとして辛辣な批判を加えていた。[1] ソシュールの言語学を援用して記号と意味との恣意的な関係を言語と現実との関係に応用し、認識がすべて言語のフィルターを通過してもたらされることをもって、「テキスト外には何もない」と唱えたディコンストラクションは、少なくともアメリカの学問的風土に移し変えられてからは、社会や現実、歴史といった用語とは疎遠であるように見えた。

新歴史主義と称される動きは、このアメリカン・ディコンストラクションに欠如していると思われた「歴史」を取り込もうとした一面があることは確かであろう。しかし新歴史主義における「歴史」の「復権」は、従来の伝統的な社会的ないし歴史的批評とは趣を異にする。作者が歴史的対象をどう描いたか、文学に描かれたものが当時の現実をどう反映しているか、などということが問題にされるのではない。歴史の語りも記述も、言語を通じてしか行うことができないならば、言語が差異のシステムである以上、デリダのいう差異（共時的な体系の中での差異）と差延（時間的な差異）の作用により、言語の意味が無限に増殖していき、語られたり記述されたりした歴史がある統一的な意味を持つことはありえない、ということになる。言語の機能についての問いかけなしに、単なる意味伝達のための「透明な」道具として言語を扱うことはもはや不可能となったのである。

しかしながら、言語の意味伝達機能にいささかの疑問を投げかけるこうした広義のディコンストラクションの全盛傾向に対して、現実社会や伝統的な意味での歴史との関わりを回復し、またディコンストラクション的言語観の浸透によって、「作者の意図＝権威」を

押し付けるものとみなされ、攻撃の的となったリアリズムの手法を擁護しようとする動きが最近、見られるようになった。これらは興味深いことに、英米文学プロパーではないドイツ文学者と２年間だけ「研究休暇」を取得して２冊の文学論の研究書を出版した老人病医、それに「大御所」的存在の英国ケンブリッジ大学のフェローによるものである。ドイツ文学者ジョン・エリスについては別稿[2]で取り上げたので、ここでは、最近相次いで出版された、ジョージ・ワトソンとレイモンド・タリスによる２冊の本[3]に言及したい。これらはディコンストラクションとその論理を批判し、リアリズムの復権をめざすことを明言している。ディコンストラクションのテーゼが常識のごとくに前提とされるこの時代にあって、彼らはいかなる戦略で目的を達成しようとするのであろうか。

『文学の確実性』（1989年）の著者ジョージ・ワトソンは、ケンブリッジ大学のフェローであり、1980年のケンブリッジ大学における「構造主義的危機」を眼のあたりにした。「容易に絶望へとつながる文学的懐疑主義に対して議論を挑」み、幅を利かせている「ラディカルな懐疑主義（ネオマルクス主義、ディコンストラクション――引用者）に反対し[4]」てヒューマニズムを擁護することがこの本の目的であると「序」において明言されている。彼は、「文学的知識は、数学や自然科学と同じく確実性を備えている」と信じ、「この本は、ヒューマニズム、啓蒙主義、リアリズムという三位一体に捧げられたものである」とし、「哲学思想の動向が確実性へと向かっている今日、文学も懐疑主義の根深い矛盾を考えるべき時である[5]」と断言している。

全16章のうち、前半８章が理論編、後半が個別的に作品や作家を扱った実践編となっている。本稿では便宜上、理論編のみに対象を絞る。論争的な前半部分は大まかに言って、文学の確実性を擁護する総論的な章（第１章）を中心に、ラディカルな懐疑主義の論理矛盾を指摘した諸章（第２～５、７章）とそれに関連して、文学的なるものの内実について論じた章（第６、８章）がある。

「確実であることについて」と題された第１章では、サッカーの選手がゴールポストを動かせないのは当たり前なのに、倫理や芸術についての議論では、議論の前提を問い直すことが有益であるかのように思われている、とまずは皮肉まじりに問題が提起される。同様に言語の体系にも文法規則という制約があるが、これを取り去ってしまえば言葉は意味をなさないであろう。ところが、最近の議論では、コンセンサス（合意）を問い直そうとする姿勢がヒロイックなものとして称えられるきらいがある。つまり、文法規則の制約を取り払い、意味作用を「自由に」することがラディカルな行為として賞賛されるのである。

しかしコンセンサスだから拒否するという議論は論拠薄弱である。そもそも現在の我々のコンセンサスはいわば教育の積み重ねによって達せられたもので、とりわけ文学上の確実さとは、科学的な合意事項が後世の発見によって覆されるのとは違って、我々の精神自体が文学によって形成されているという事実と関係があり、他の誰かがもっと優れた詩や劇を書こうとも、ホメロスやシェイクスピアが偉大であるという合意に基づく判断は揺るぐものではない、と「文学の確実性」を論じていく。すなわち、文学は自然科学の知識と同様に、いやそれよりも確実でありうるのだ、というのがワトソンの確固たる信念であり、懐疑主義への批判はここから発していると言ってもよい。まさに筋金入りのヒューマニスト・伝統主義者と言えるであろう。

これに続く諸章では、ヒューマニズムに反対するさまざまな理論や論法、すなわちラディカルであるという看板を掲げた文学理論、条件設定（conditioning）の論法、自己免除の論法、記号の恣意性の議論、イデオロギー論のそれぞれが持つ特徴と、それらが抱える自己矛盾や問題点が論じられている。例えば、理論はラディカルでありうるか。確かに「記号の恣意性」の理論やバルト、デリダ、ロッジらの理論は意図としてはラディカルであるが、実際にはそうではなく、結局のところ自己矛盾に陥っている。ジャンル論のようにたとえ有用であるとしても、物事の認識や他人との意見交換のスピードアップが実現する程度である。また、ある人が一定の思考をするのはユダヤ人だから、ブルジョアだから、男だから等の条件設定をする論法（「20世紀のヒューマニズムの最も強力な敵」）は、そう言いさえすれば相手の論拠を崩したと誤って思い込んだり、自己免除＝自己矛盾の罠に陥ったりする危険があるとして批判される。（第７章で「条件設定」論法の具体例として、イデオロギーに囚われているのにそれを自覚していないとしてリベラリズムを攻撃するイーグルトンの論法が批判されている。）

この自己免除の議論の特徴と問題点が第４章「自己否定する議論」で徹底的に論じられている。例えば「何事も確実ではない」と言明すれば、その言明自体も確実ではないことになる。今世紀のこの種の言明の特徴は、これらが問い返すことを許さない一種の自信をもって主張されていることだとワトソンは述べている。限定語句をつけず、徹底的な物言いをするこうしたスタイルが出現した理由は、こうすれば目新しい印象を醸し出せること、個人的な行動と道徳的規律の隔絶が当たり前になったこと、「自分にはわかるのだ」という優越感を持つことができることである、と彼は分析するが、現代文学理論の文章の際立った特徴でもあるレトリック肥大症とそれが生み出される心理的な背景をうまく言い当

てているように思われる。

さらにワトソンは、ソシュールの言った記号の恣意性というメタファーを彼の弟子と称する者たちが無限に拡大し、言語学の発展の歴史をよく知らない人々によってこの考えがラディカルであるという評判が高まったいきさつを跡づける。こうした誤解に基づく1960年代以降の文学理論は、①哲学的言語学的に時代遅れであり、②言語でしか批評は行えないにもかかわらず、この言語は現実とは切り離されているという矛盾を抱えている、と彼は鋭く指摘する。ディヴィッド・ロッジらは、この記号の恣意性がリアリズムにとって致命的なものであると言うが、言語が現実を描けないというなら、バルトやデリダの著作も、言語の機能について記述することはできなくなるのではないか、とここでも自己矛盾の論理が暴露されている。

第6章では「ロゴス中心主義」を批判するディコンストラクションの「言語中心主義」が揶揄される。人間の現実のほとんどは言葉で言い表せないものであるにもかかわらず、現代思想においては言語が絶対化されてしまっているとワトソンは述べる。

第8章では、歴史とフィクションとの関係について、歴史さえもフィクションであるとしてしまいかねない現代の風潮に警告を発し、人間性について解釈を行うという点で歴史家と小説家は同一なのであるが、ただし小説には歴史のような偶発事は存在せず、諸事件が、あくまで目的的である点だけが違うのである、と論じられている。

ワトソンの立場は、例えば「変化の政治学[6]」をめざすキャスリン・ベルジーやイーグルトンなどが批判の的としている「リベラル・ヒューマニスト」の最たる人物であろう。ベルジーは、デリダ流ディコンストラクションの非歴史的懐疑的な要素を批判する一方で、ディコンストラクションの言語観についてはこれを肯定し、前提とすべき原点として受け入れ、歴史を純粋で言説の外にある経験と見る伝統的、経験主義的傾向を批判する。ベルジーの立場からは、次に取り上げるタリスも批判を免れないであろう。

本職は老人病の専門医であり、現代の文学理論の基礎となっている言語論をソシュール自身の言語学に照らして批判した『アンチ・ソシュール』（1987年）の著者であるタリスが出版した『リアリズムの擁護』（1988年）も、前述のワトソンと重なる問題意識に支えられている。タリスは、現代の文学批評の傾向が小説の発展にとって真の脅威であるという認識に立って、リアリズムに対する悪評を検討・論破し、改めてリアリズム小説を擁護しようと試みている。

この本は理論編と実践編からなり、それぞれが2つの部分に分かれている。理論編(1)は

「リアリズムでは非現実化した現実を描けない」「真実の物語などありえない」「映画の出現によりリアリズム小説は時代遅れになった」という見解に対して著者の意見を提出する部分である。理論編(2)はアルチュセールをはじめとするイデオロギー論の陣営から加えられたリアリズム批判を検討している。実践編(1)では反リアリズムのさまざまな実作品を検討し、実践編(2)でリアリズムが取り組むべきいくつかの課題を提案するという体裁になっている。

理論編(1)ではまず、「現実が非現実化・断片化した」と論じる論者があげてみせる根拠に逐一論駁する。これまでは文学作品に有機的統一性を発見しようとしてきたのが失敗して、今度はその対極に走ったというだけである。しかし、対極ではあっても、馬鹿げている点では同様である、とタリスは診断する。現実が現実的ではないから描けないと論じる人々が自己矛盾に陥っていることも指摘されている。ワトソンが「自己否定する議論」の章で説明したように、例えばフィリップ・ロスは、アメリカの現実が描出不可能だということを述べるために、一片の現実を描いてみせているのである。次に、現実は語られた時点で人工的なものに変えられ歪められるという見解、さらに映画の発展が小説の意義を弱めることになるという見解に、それぞれ反論を提出している。いずれも人生や現実を描くことの積極的な意味を肯定し、とくにリアリズムは人間の意識を描くのに適しており、リアリズム小説の可能性は依然として大きい、と力強い論調を展開している。

理論編(2)はイーグルトン、ベルジーらネオ・マルクス主義者に影響を及ぼしたアルチュセールのイデオロギー論とそれに基づくリアリズム攻撃（「現実を問題化せずに複製することによって、イデオロギーの働きを補強するものである」）に対し、リアリズムはまさに現実を表現することによって状況を変えうるのであるとの主張が提出されている。

実践論(1)では、アラン・ロブ＝グリエ、レーモン・ルーセル、ドナルド・バーセルミら反リアリズムの手法で書かれたさまざまな小説の例があげられている。それらは言語が「同語反復的」「自己言及的」で、純粋に言語外の現実を指し示すことはできないという考えに基づき、気紛れな展開であったり、合理的な説明がつかないことを特徴としているが、タリスはそれらが自己矛盾を来していること（説明を拒否しているが、批評しようとすればその非合理性を説明せざるをえない）を指摘している。

最後の実践編(2)では、リアリズムの積極的な擁護のために、いくつかのテーゼが提案されている。リアリズムの定義では、ファンタジー及び言葉遊びと区別されること、また19世紀的リアリズムに限定されない現代のリアリズムを創造することが重要であると述べら

れている。とともに、リアリズム攻撃のさいによく用いられる誤解（「リアリストは現実を模倣しようとする」「リアリズムは実験に反対である」等）を解くことも重要であるとされている。最後にタリスは、技法上のそれを含め、現代のリアリズムは難題を抱えているが、それを解決していく努力がリアリズムを復権し、まだ試されたことのない可能性を切り開く要であると論じる。この本は、19世紀的リアリズムの成果にとどまるのではなく、新しいリアリズムを探求していこうという力強い呼びかけで終わっている。

タリスのこの本はさまざまな攻撃や批判にさらされるリアリズムに対する深い愛情に裏打ちされた、リアリズムの可能性を探求する試みであるとともに、現代のリアリズム作家への励ましの書でもある。良質の作品を読みたいと願う読者のいわば皮膚感覚から生まれたものである。文学作品や評論からの引用も豊富で、『アンチ・ソシュール』とともに、文学プロパーの研究者の顔色をなからしめる労作である。

以上2冊、およびジョン・エリス『反ディコンストラクション』に共通するのは、徹底した経験主義をその根本にすえ、机上の空論を避けようとしていることである。また、ソシュールという原点に戻り、当時の言語学の状況の中での、また言語学の歴史（文学理論の歴史ではなく）の流れに置いてみたソシュール言語学の位置と評価を吟味し、ソシュール自身の意図と突き合わせて、最近のディコンストラクションと反リアリズムの潮流の基礎をなしているソシュール理解の誤りと矛盾をえぐり出そうとしている。当時のソシュールは記号の恣意性という概念を画期的ではなく常識的なものとして提出していたという指摘[7]（ワトソン）や、ディコンストラクションの議論において、記号の恣意性がいつのまにかシニフィアンの恣意性にすりかえられているという指摘[8]（エリス）は、ディコンストラクションの議論の是非をめぐる論争の中で重要な論点となるであろう。

ワトソンとタリスの重要な功績は、「自己否定する議論」がかくも広範な言説に及んでいることを明らかにしたことであろう。論争においてとかく有利な立場に立とうとするために、あるいは目新しさやラディカルな感じを与えるために、「すべての」「必ず」などの言い回しを使うことの危険性の指摘もさることながら、いかに多くの論者が自己矛盾を来しながらそれに気づかないという状態に陥っているかを彼らはあますところなく明らかにした。この点はエリスにも共通するところである。

しかしながら、ワトソンもタリスもエリスも、彼らの徹底した経験主義が強みとなり同時に弱みともなっていることを指摘しなければならないであろう。ワトソンは該博な文学史の知識を駆使して「地についた」文学研究のあり方を語る。その際に、現代の文学理論

が出現しなければならなかった背景を視野に含めず、理論をあまりに単純化してしまうきらいがある。例えば、文学理論家たちが言語にこだわるのは、言葉に表現しなければならないという強迫観念からというよりは、ラカンの「無意識は言語のように構造化されている」に象徴される、人間の成長過程における言語体系への参入という議論を無視できなくなっているからである。タリスの論調は経験的事実に基づいたものであるため、インパクトはあるが、文学理論の議論において焦点になっていることとどれだけかみ合っているであろうか。もちろん、理論も、頭の中で組み立てただけの、経験とあまりにかけはなれた空論であってはならないが、自己の感覚あるいは経験だけに拘泥することによって、自分の論拠を狭める可能性はないか、ということである。

実作者でもあり、現代の文学理論の理解者でもあるディヴィッド・ロッジは、近作の『バフチン以後』[9]の中でラディカルな（意図を持った）文学理論に対して揺れ動く態度を示している。それは「作者の死」に対してである。ロッジは反リアリズムを標榜し、現代文学理論の基礎となっている言語観を基本的に支持している。ワトソンが「作者の死」について、「作者の死」を書いたのはフーコーだが、ではその事実もどうでもよいのか、と揶揄していたことが想起されるが、作家であるロッジはさすがに自分の死を肯定するわけにはいかない。このあたりにも、現代の理論家のジレンマを見出すことができる。

ともかく、文学作品と文学理論、言語理論との関わり合いを無視することができない状況であることは確かである。ディコンストラクション的風潮に挑戦状を突きつけ、活発な議論を巻き起こそうとしたワトソン、エリス、タリスらの主張は、相も変わらずデリダの理論とその意義を理解できない伝統主義者の繰りごととして無視されるのか、それともディコンストラクション的懐疑主義が支配的であるように見える現代の「文学」認識に風穴をあけることになるのか、そのゆくえを慎重に見守りたい。

注

1. Frank Lentricchia, *After the New Criticism*, Univ. of Chicago Press, 1980.
2. 拙稿「ディコンストラクションの風潮への警鐘 — ジョン・エリス『反ディコンストラクション』 — 」、*New Perspective* 第153号、新英米文学研究会、1991年、pp.83–84, 92
3. George Watson, *The Certainty of Literature: Essays in Polemic*, Harvester Wheatsheaf, 1989; Raymond Tallis, *In Defence of Realism*, Edward Arnold,

1988.

4. Watson, p.ix.

5. Ibid., p.xii.

6. Catherine Belsey, "Literature, history, politics," in David Lodge ed., *Modern Criticism and Theory*, Longman, 1988, pp.400−410.

7. Watson, p.51.

8. John Ellis, *Against Deconstruction*, Princeton Univ. Press, 1989, pp.57−59.

9. David Lodge, *After Bakhtin*, Routledge, 1990.